

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第3集

1992年3月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市内には、国指定史跡の今市大念寺古墳、上塩治築山古墳など、全国的によく知られている重要な古墳のほかにも、数多くの小規模墳があります。

それらの古墳は、それほど目立ちはしませんが、地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な郷土の文化遺産です。

このたび、これらのなかでも、これまでほとんど紹介されたことのない高浜の石臼古墳、大前山古墳、宇那手の宇那手塚山古墳の3基の横穴式石室をもつ小規模墳をとりあげ、報告いたしました。

また、横穴式石室をもつ古墳は市内にもかなりありますが、近年石室の損傷が目立ってきています。そのなかでも特に損傷の激しい上塩治築山古墳など3基の古墳の現状について報告しましたが、貴重な文化遺産を守り、そして継承するために、早急な対応が必要といえます。

例　　言

1. 本書は、出雲市内に所在する石臼古墳、大前山古墳、宇那手塚山古墳の報告と市内に分布する横穴式石室の保全化状況をまとめたものである。
2. 各古墳の調査・執筆は以下のものが携った。
島根県教育委員会文化課 佐藤雄史、西尾克己
島根大学学生 磐村賢治、原田敏照、守岡正司
3. 石室の保全化状況と編集については、出雲市教育委員会が行なった。

目　　次

1. 石臼古墳	1
2. 大前山古墳	3
3. 宇那手塚山古墳	6
4. 横穴式石室保全状況調査	9
(1) 上塙治築山古墳	10
(2) 放れ山古墳	13
(3) 宝塚古墳	15

1. 石臼古墳



図1 石臼古墳位置図

出雲市と籾川郡大社町との境にあたる出雲市矢尾町矢尾西の通称前後谷に位置する。北山南麓のやや急な斜面に築かれた山寄せの古墳で、後世の開墾等により墳丘の改変が著しく、墳形は不明である。

埋葬施設は切石からなる両袖式の横穴式石室で、ほぼ南に開口する。玄室には多くの土砂が流入し、上部のみが露出している。現状では奥行き2.0m、幅1.2mを測り、奥壁は3枚、側壁は複数の切石より構成されている。東側の側壁は大きな1枚石を据え、その石と天井石（現在は失われている）との隙間に細長い石2個を1段に置く。西壁の積み方は東壁と同様であるが、玄門付近では3段積とな



写真1 石臼古墳(1)・大前山(2)遠景

り、一部に切組積み（石の角をL字にカットし、その部分に他の石の角を置く石積み技法）が認められる。玄門は長方体の袖石を側壁に接して立て、さらに、その上に楣石（現在は失われている）を置く構造である。なお、側壁の一部は楣石を受けるためにL字にカットされている。

羨道部は埋没しており、詳細は不明である。

出土品は知られていない。

築造時期は古墳時代後期に属し、石室の構造より後述の大前山古墳より新しい。



写真2 石臼古墳石室（奥壁と西壁）

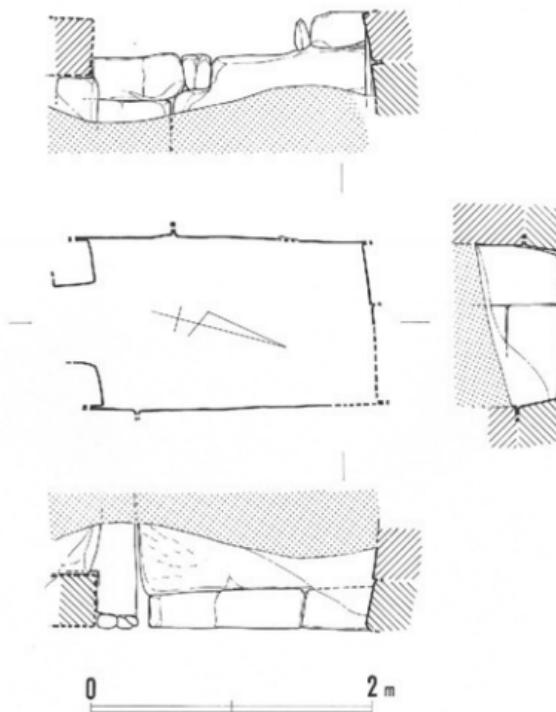


図2 石臼古墳石室実測図

2. 大前山古墳

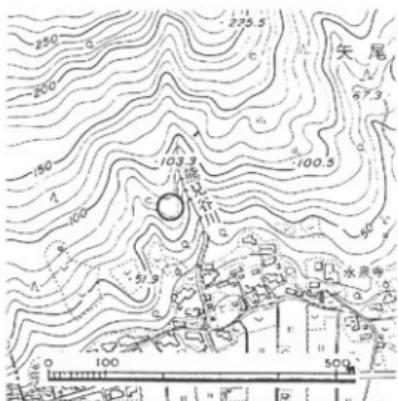


図3 大前山古墳石室内部 (2は石臼古墳)

石臼古墳より東方300m、出雲市矢尾町矢尾西の熊見谷にある通称大前山の東側斜面に位置し、出雲平野を見下ろす、かなり高所に築かれている。屋根沿いに築かれた10m程度の小規模な古墳である。山寄せの古墳であるため、現在は盛土の多くが失われ、墳形は不明である。

埋葬施設は割石からなる両袖式の横穴式石室で、ほぼ南に開口する。玄室は奥行2.2m、幅1.1m、高さ1.5mを測る。奥壁は大小2個の石を上下に積む。側壁は比較的大きな腰石を据え、その上に小さな割石

を4、5段に積み、袖石の上端で目地が通っている。玄門は柱状の袖石を立て、その上に小さな割石を積み、さらに楣石を置く。羨道部も玄室と同様に割石を数段に積んでいるが、土砂が流入しているため、詳細は不明である。なお、石材は現地附近から産出する山石である。

出土品は知られていない。



写真3 大前山古墳石室内部

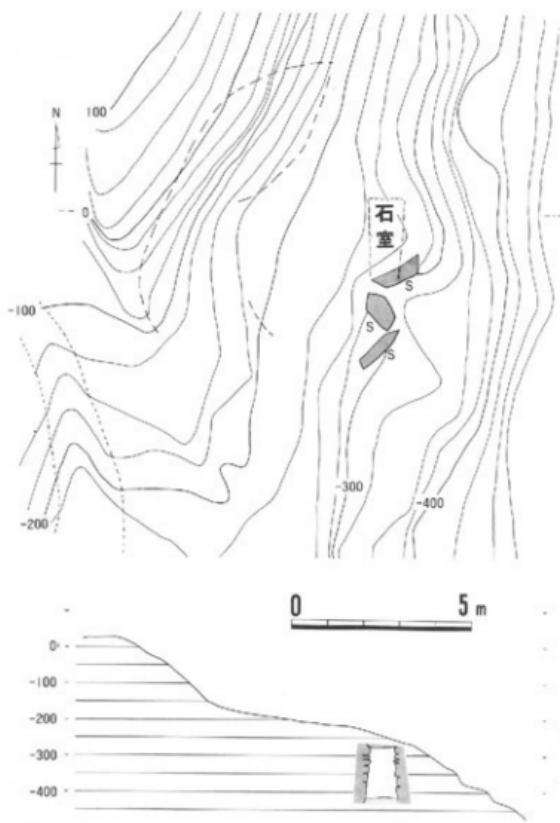


図4 大前山古墳墳丘測量図

築造時期は古墳時代後期に属する。石室の構造は大念寺古墳（出雲市今市町所在）と類似しており、北山周辺においては最も古い横穴式石室の一つと考えられる。

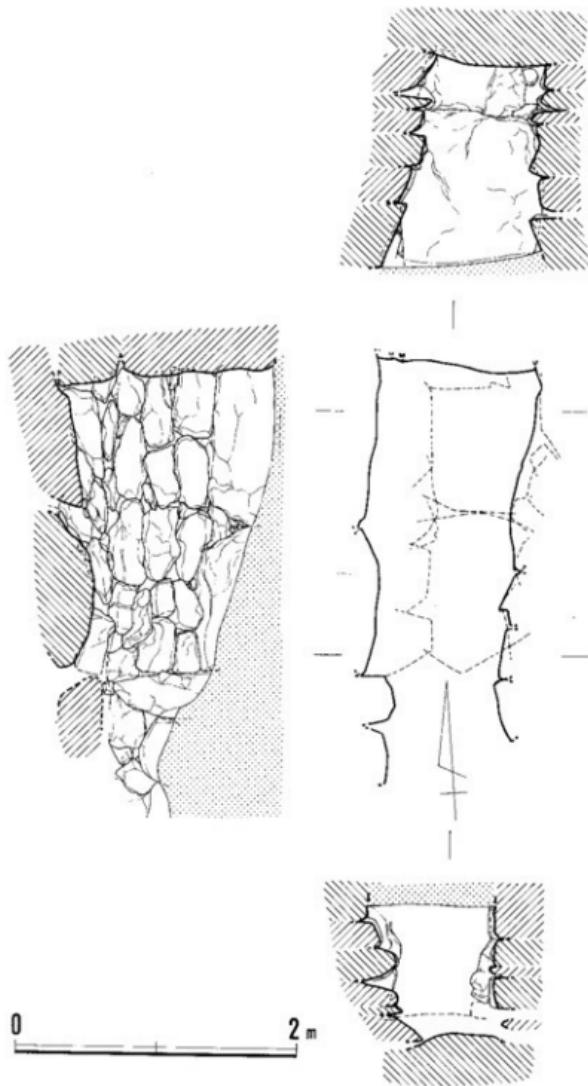


图5 大崩山古墳石室実測図

うなてつかやま
3. 宇那手塚山古墳



図6 宇那手塚山古墳位置図

斐伊川から南へ約1km入った出雲市宇那手町の谷あいに位置する。低い屋根の先端に築かれた山寄せの古墳で、径13m、高さ2mの円墳といわれる(註)が、現状では横穴式石室を覆う程の盛土しか認められない。

石室は自然石や割石からなり、西南に開口する。玄室内には土砂が堆積しているので、規模は明らかにできない。現在長3m以上、幅1.5m、高さ1.6mを測る。奥壁は1枚、天井石は2枚以上からなるが、側壁は大念寺古墳と同

様、細長い石を4、5段に積む。なお、両壁とも中程から天井にかけてかなり内側に傾斜している。これは1964年(昭和39年)の水害により西側の壁の上部が露出し、かつ、石室がかなり外側に傾いたためである。

玄門と羨道部は埋没している。

玄室の東壁に接して、2枚以上の切石が置かれている。奥壁に隣接する石は長さ100cm、



写真4 宇那手塚山古墳遠景(↓印が古墳)

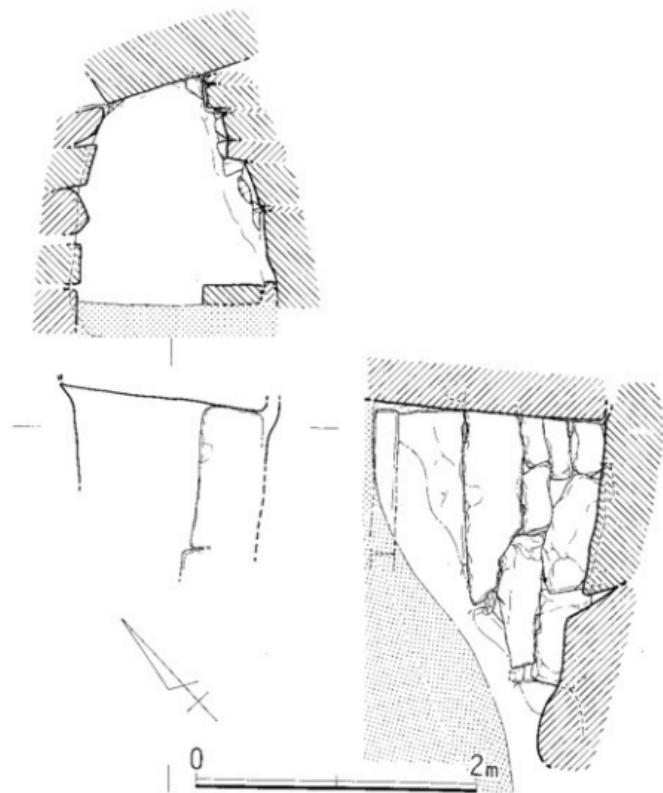


図7 宇那手塚山古墳石室実測図

幅40cm、厚さ15cmの長方体を呈する。これは遺骸を置いた屍床の一部と推定される。

出土品は知られていない。

時期は古墳時代後期に属する。

(註) 池田満雄「宇那手塚山古墳」『出雲市の文化財』第1集 1956



写真5 宇那手塚山古墳石室内部

4. 横穴式石室保全状況調査

はじめに

出雲市は、県内でも有数の埋蔵文化財密集地で、とりわけ、横穴式石室を有する後期古墳は、その規模においても、また、バラエティーに富むことからみても、全国的に卓越した地域といえる。

このように、貴重な横穴式石室ではあるが、雨水の浸透などで、年々風化が進み、なかには、早急な措置を要するものもでてきてている。

調査は、市内にある古墳のうち、国指定史跡（4基）、県指定史跡（3基）について実施し、小規模石室墳は対象にしていない。それらの古墳について、現地踏査して石室の損傷状況を確認した。その結果、各古墳とも、大なり小なり問題はあるが、特に上塩治築山古墳（国指定史跡）、宝塚古墳（国指定史跡）、放れ山古墳（県指定史跡）において、大きな異状を認めた。

今回は、この3基の古墳について、横穴式石室にある石棺や、石室の損傷状態を報告しているが、これらについては、近い将来、猶予しがたい事態に陥る可能性があり、早急に対応する必要がある。



図8 横穴式石室墳位置図

(1) 上塩冶築山古墳〔国指定史跡〕

この古墳は、神戸川右岸微高地に立地し、付近には、半分古墳・地蔵山古墳がある。

墳丘は、後世の改変をかなり受けしており、現在では方形に見えるが、本来は径40m程の円墳と考えられている。内蔵されている横穴式石室は、切石を使用した整美なもので、所々に切組積みの手法がみられる。また、石室内には家形石棺が2基置かれている。

現存する遺物としては、金銅冠・玉類・円頭大刀・方頭大刀・槍・鉢・鎌・馬具・須恵器・埴輪等がある。

さて、石室の保全状況であるが石材にヒビの入っている箇所は多数あるが、特にヒビの大きな箇所が9カ所あり、そのうち既に崩落しあげていている箇所が2カ所ある。右側の袖石についてはヒビの幅が拡がってきており、表面の剥離も著しい。また、手前の家形石棺の屋根についても、数箇所の凹があり、横口の真上あたりと、奥側の部分では、かなり範囲も広くなっている。そこから徐々に崩れており、これらの崩壊の原因は、雨水や温度差によって生じる水滴によって徐々に生じたものと思われるが、石棺の石材は、凝灰岩で比較的軟質な事から、表面の整形された部分が剥がれるとその後の崩壊はかなり急速に進むようである。



写真7 上塩冶築山古墳横穴式石室



写真8 上塙治築山古墳側壁損傷状況



写真9 上塙治築山古墳石棺損傷状況（奥から）

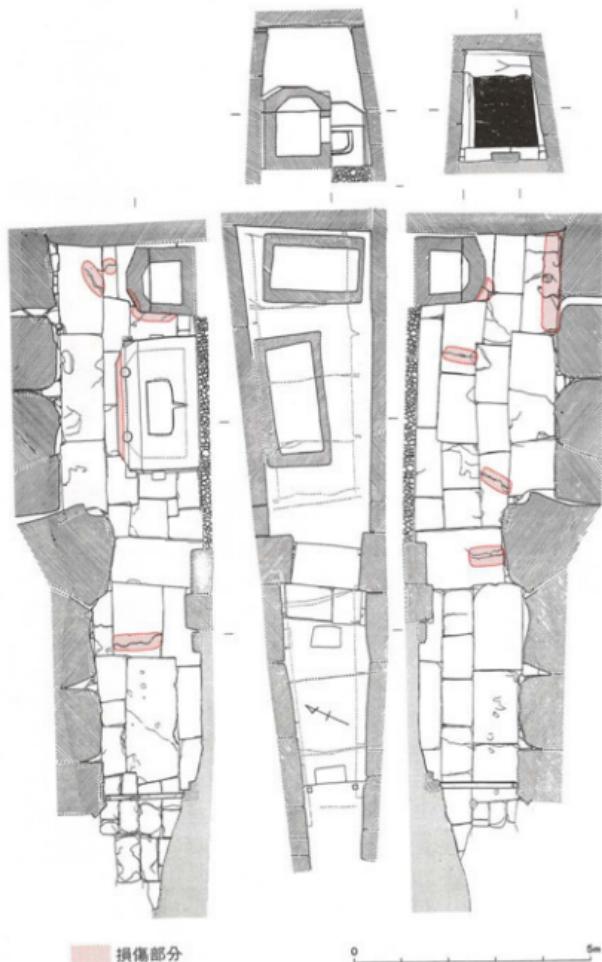


図9 上塙治築山古墳横穴式石室保全状況

(2) 放れ山古墳〔県指定史跡〕

新宮川左岸の低丘陵の突端に築かれた小円墳である。墳丘は、径13m、高さ3mの円墳で、南西に開口する横穴式石室がある。

横穴式石室は、全長5.3m、玄室長3.3m、幅1.7mで、凝灰岩の小形の切石で構築された側壁が持ち送りの構築法を用いていることに特徴があり、また、玄室内に3体分の有縁石床があることで、よく知られている。

大正年間に発掘され、金銅装大刀をはじめ、直刀、馬具類、金環、鉄鎌、玉、須恵器などが出土している。

石室は、凝灰岩の切石で構築されているので雨水には脆く、かなりの損傷がみられる。左側壁では、おそらく墳丘中央にはえているサクラの大木の根によって奥壁寄りの上部がかなりせり出し、またそこから浸透したと考えられる雨水によって、石材がかなり脆くなつて崩れやすくなっている。右側壁では、羨道部寄りが少し膨らみ、せりだしている。また、樋石の裏側を雨水が浸透して石材を損なっているほか、羨道部の天井石を支える側壁上部の石が、ひび割れたり、一部失われているので、崩落の危険性がある。

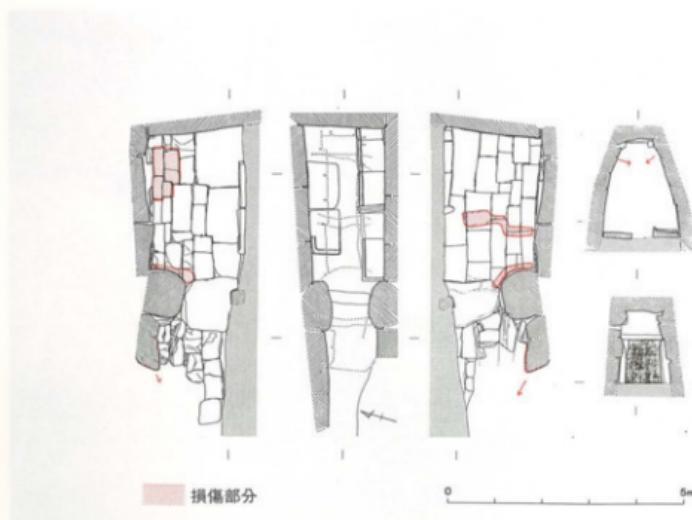


図10 放れ山古墳横穴式石室保全状況

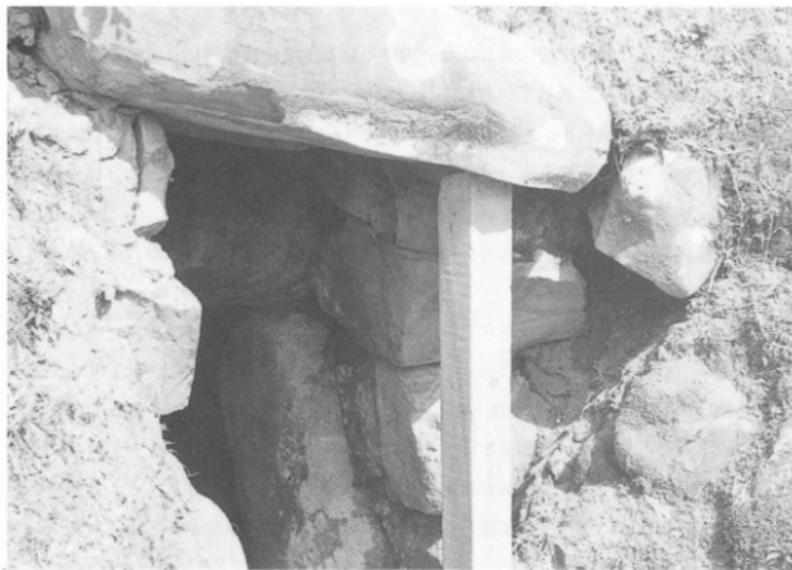


写真10 放れ山古墳石室入口損傷状況



写真11 放れ山古墳石室側壁損傷状況

(3) 宝塚古墳〔国指定史跡〕

この古墳は、神戸川の左岸、出雲西高校の東側に広がる水田中に位置している。周囲には、放れ山古墳・妙蓮寺山古墳が存在する。

墳丘は、かなり失われており、石室の天井石が露出している。石室は、片袖式の横穴式石室で、凝灰岩の切り石を使用している。玄室は、奥行3.6m・幅2.1m・高さ2.5mを測り、南向きに開口している。石室内には、長さ2.3m・幅1.5m・高さ1.5mを測る横口式家形石棺が1基置かれている。出土品としては、数個の鉄鏹がしらされているのみである。

石室の保全状況は、左側壁の上段の石が完全に2つに割れており、割れた奥側のものが石室内へと迫り出してきている。また、一番奥の天井石にも数個所ヒビが入っており、表面が、崩落する恐れがある。その他にも3カ所石材にヒビが見られる。また、石棺の身にも大きくヒビが入っている。また、石室は周囲の水田面より低い位置にあり、農繁期には、石室の半分が水没することも石室に影響を及ぼしているものと思われる。



写真12 宝塚古墳石室側壁損傷状況

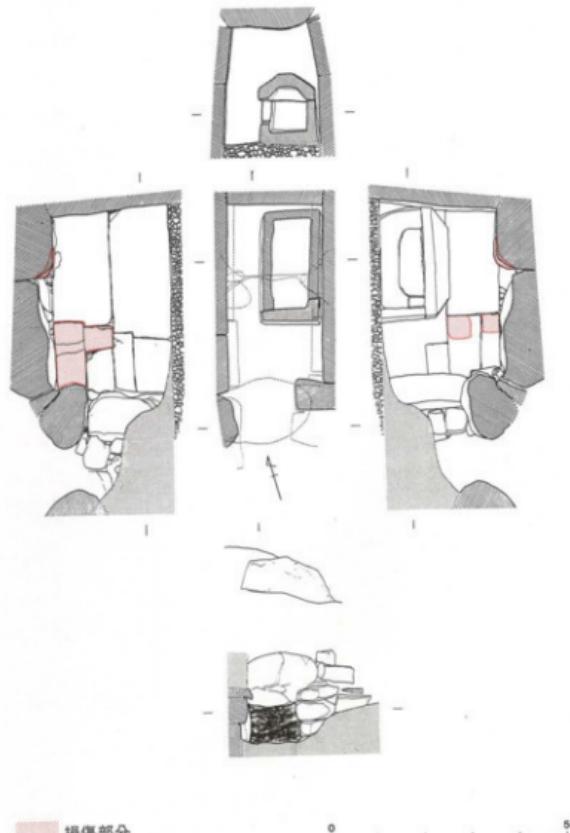


図11 宝塚古墳横穴式石室保全状況

平成4年3月25日 印刷

平成4年3月30日 発行

出雲市埋蔵文化財調査報告書

第3集

発行 出雲市教育委員会

印刷 総合印刷